

稗田の見えぬ花

星影 翔

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一度見たものを忘れないという能力を持った稗田家の七代目当主、稗田阿七、彼女が恋し、愛した彼。彼もまた彼女を愛した。しかし、運命は二人を引き離すように動いていく。そして、二度と会えぬと悟った彼女はその能力を利用し、転生して彼に会おうと決意する…。

目次

運命は二人を隔てて

1

運命は二人を隔てて

私の名前は稗田阿七（ひえだのあしち）由緒正しき名門の家、稗田家の七代目当主をしている。私には生まれたときからある特別な能力を持つている。それは一度見たものを忘れないという能力である。これは私が死んでも後々生まれる私の子孫にその記憶が受け継がれる。いわゆる《《転生》》を可能にし、私はその能力を活用して、一代目である稗田阿一（ひえだのあいち）の時からずっとこの幻想郷の歴史を編纂へんさんしている。しかしながら、この能力を得てしまったせいかわ稗田家の女性は他の人々よりも寿命が短く、体も弱い。自分のことながら可哀想だと思う。しかも、この幻想郷の歴史を記録していく過程でどうしても大半が机の上での作業になるから、結局はこの家を殆ど出たことがないままその一生を終える。

今も、私はいつもの家で、いつも使う筆を手に取り、いつもの見慣れた白い用紙に向かって筆を走らす。それが不満とは思わない。でもたまには退屈と思う時だってある。そういう時は大抵……

「お、今日もやってるね。」

この人がやって来るのだ。

「当然よ。これが私の仕事なんだもの。」

私はそう言つて、縁側に座つた彼の顔にえいっと一本。黒い線をいれてやった。

彼は何が起こつたのか分からなかつたらしく、私は思わずクスクスと笑いながら彼に手鏡を渡す。

「なんだこりゃ!!」

それを合図にしたように、私はついに筆を落として笑い転げてしまった。さすがに彼も私の爆笑に目を丸くする。でも私の笑いは止まらなかつた。暫くして、ようやく笑いが収まつてきた私に彼が一言。

外に出ないか？

○ ○ ○ ○ ○ ○

彼に連れられ、やって来たのは私達の村を一望できるほど高い崖の上だった。私達は

そこに一本だけ寂しく生えている木の上に座つて豆粒みたいに小さい人々を眺めている。

私はこの景色が好きだ。こうやって人々がどれほど小さいか、私が悩んでいるときにここに来ると益々自分が小さく感じて悩んでいることがどうでもよくなってくる。

「おーいー」

下から彼の声が聞こえる。私は「はーい」のんびりした口調で返事をする、下を覗き込む。

下では彼が笑いながらこちらに手を振っていた。さつきまで墨で真つ黒だった顔はもうすっかり落ちていた。

「もう帰るぞ〜」

「ちよつと待つて」

私は靴を脱ぐ。そしてそれを彼に向けて落とすと、彼は見事全て捕まえて足元におく。続けて…

「い〜くよー」

私も落下し、無事彼に抱かれる。

ありがとうと一言感謝の言葉を述べたうえで私達は歩き始める。

夕陽が木々に生い茂る葉から零れ、時に眩しくなる帰り道、私達はただ手を繋いで

帰った。彼とこうやって手を繋ぐことができないのもこれが最後かもしれない。そんな思いがあるせいでさっきまでのような会話ができない。きつと彼も同じ事を考えているんだと思う。

「あのさあ…」

話を切り出したのは彼だった。

「今度、結婚するんだって？」

そうだ…、その話だ。私が一番聞きたくて聞きたくなかった話。

「ええ、その通りよ。」

その瞬間だけ、握っていた彼の手の力が強くなった。

私は彼を見る。彼は強く何かを見るみたいに目を細くして少し下を向いていた。

そして結局、私達はそれ以上何も話さなかった…。

そして当日、私がこの村を離れる直前、私は最後に彼に会うことができた。彼は普通そうに振る舞おうとしているけれど、その背中には悲しみが、寂しさが感じられた。それを感じた私はただ胸の苦しみに耐えるだけで何も言えなかった。

言いたいのに言い方が分からなくなってくる。頭が真っ白になってくる。

「いつか、私が転生したらいつか…!!」

そんなことしか言えなかった。

すると…、彼は私へ振り返って

「俺は、お前が幸せだったらそれでいい。」

私は彼から離れていく。彼も私から離れていく。それが本当に苦しくて、胸が痛くて仕方がなかった。

(本当に…ごめんなさい…!!)